
1 時 差

イギリスに向かう飛行機の中で、困ったことに気がついてしまった。

日本との時差は9時間。サマー・タイムだと8時間になる。日本の正午が午前3時か4時だから、そんな時間に、うっかり電話をしたりすると、たいへんな迷惑だ。

さて、日本からシベリア上空を飛ぶ直行便でいくと、飛行時間は12時間。時差を引くと4、5時間後にロンドンに着くことになる。飛行機のトラブルでもない限り、まずその日のうちに着くと考えてよい。

困ったことというのは、実はイギリスのホテルを、翌日で予約していたのだ。なぜそんなことをしたのか。よく考えても理由がわからない。しいていうなら勘違いだ。若いころならば、そそっかしいですむことだが、最近はこの手のミスが気になる。ある段階でふと勘違いすると、それが頭の中に固定されて、いつの間にか既成事実になってしまうのだ。

ホテルの予約は、我ながらスマートにやったと内心満足していた。インターネットでイギリスの都市の案内を探し、目的のシェフィールドのページを開いて、ホテルのリストでファクスを送ったのだ。ベッド・アンド・ブレックファーストという一泊3000円程度の安いところでも、手紙で予約するならこの方法でいける。私の場合は少し急いでいたので、ファクスのサービスのあるホテルにした。旅行業者に予約してもらおうと、かなり高いホテルになってしまうだろう。それにしても、予約の日を間違うとは……。

さて困った。海外旅行の初日には、いつも何かトラブルをやらかすのだが、今回はどうしたものか。シェフィールドの到着予定時刻は、午後8時。それから探すのは、不可能ではないけれども、長旅に疲れた身としては、リスクが大きい。そうだ。イギリスには、非常に頼りになるツーリスト・インフォメーション・センターがある。さっそくロンドンのヒースロー空港のインフォメーションにお世話になることにした。窓口の女性は、「こんな時間にまたややこしい話を持ち込んで」という顔だが、翌日のホテルの電話番号を調べて、電話をしてくれ、無事一件落着。おかげで、翌日一日やることなく、ゆっくり休めた。

だが、ひとつ間違っていれば、かなりのダメージがある勘違いだった。どうも私は時差との相性が悪い。

アメリカで、サウスダコタというインディアンの居留地が多い州に行った時のことである。インディアンの人たちも参加した考古学の会議だったが、サウスダコタ時間というのか、何かにつけ時間が守られず、少しあきれはじめていた。会議が終わって、遺跡などを見学するツアーに参加した。州の西のほうの町についたところで、いったん休憩して何時に出発するというアナウンスがあった。あまり英語がうまく聞き取れないころだったが、集合時刻さえわかれば問題はないので、しばらく近辺を散策して、バスに戻った。だが、予定の時刻をいくら過ぎてても、人が集まってこない。さすがにあきれ果てて待っていると、1時間を過ぎたころから、少しづつ人が戻ってきた。いくらなんでもちょっと変だと思って聞いてみると、なんと州の中に時差の線が走っていたのだ。よく考えるとあたりまえのことかもしれないが、極端な言い方をすると隣の家と時間が1時間違うということだってありうるのだろう。日本に住んでいると、その辺の感覚がいまひとつしっくりこない。ともかく、1時間遅れるほうの時差でよかった。逆だったらみんなにひどい迷惑をかけるところだった。

蛇足ながら、実はこの文章も、朝4時に目が覚めた時差の産物。

1996 新納泉 著作権フリー

【付記】私が初めてインターネットのことを知ったのは、1991年にイギリスのサウサンプトンに滞在していたとき。本エッセーの頃はまだe-mailも普及していなかった。「インディアン」は、いまではネイティブ・アメリカンと呼ぶことが多いが、その頃は当事者の間でも「インディアン」という呼び方が普通だった。